

旧満州ハルピンの男狩り

宮城県 吉国 成美

首都敗戦

昭和二十年八月十七日の朝、私は牧野さん寺本さんと共に、ハルピン駅の一番ホームに寝ころんでいた。伊藤博文公の胸像が、ホームの駅舎寄りにホコリを浴びて立っている。

南満行きの汽車を探しているのだが、それらしい汽車は一向に見当たらない。もっとも出るか出ないか当てもないのだが、ハルピンを離れるには汽車に頼るより方法がないのだ。

敗戦二日目のハルピン駅は、相変わらずザワザワガヤガヤしていた。満鉄社員は従前どおり勤務している模様だ。私共は午前中頑張ってみたが、そのうち疲れも出て午後からは、博文公の土台を枕にして昼寝した。

その日はとうとう汽車を求めることができなかった。三人ですすごすご家へ引き返したが、昼寝しているうちに

博文公の腕のところに掛けておいた、私のコームリがなくなっていた。

翌朝再びハルピン駅に南満行きの汽車を探した。けふこそハルピンから逃避する決心だ。リュックには当分必要な食糧や甘味品、タバコ等それに二、三の着替えも入れておいた。金も妻と折半して十分だ、ただ渡満以来持ち続けた腕時計のみ妻のもとに置いてきた。

今年は例年になく雨降りが続く、小雨は今日も降っている。午前中は昨日と同じ待ちぼうけ。午後になって私共を探してホームに特務科長が姿を見せた。特務科長も南満州へ逃避する予定だったらしいが、家族も多いしそれに科長自身の年齢的なこともあり、負担も多いのでハルピンと運命を共にするという。別れるとき私共に当分の旅費だと、新聞包みのまま一万円置いて帰っていった。

夕方牡丹江方面から列車が入ったので、私共は乗車を依頼した。二両の機関車で十六両編成の貨車を牽引していて、車中には武装した日本人ばかりが乗っている。この列車は東満方面からの最終引揚列車で、兵隊は一人も乗っていないが、行けるところまで南行するそうだ。一

両目から東安省の警察隊、牡丹江省公署、東滿地区の軍事郵便所、牡丹江電々公社、滿拓公社、県公署、電業会社など総ての官公署がそれぞれ各車両に分乗し、移動政府の一団みたいなものだった。

私共は三両目の軍事郵便所の一隊に分乗を許されたが、知人も二、三人居たので幾分安心だった。列車はその晩ハルピンに一泊し、翌日になって一路南下した。この貨車は行けるところまで行くそうだ。準備も万全で各車両とも白米入りの麻袋を貨車の周囲に積んで胸壁を作り、所々に銃眼を開いて機関銃と小銃で装備した、全く力強い動く塹壕のようなものだった。

南行しながら各駅で停車しては、水と燃料を補給した。列車は徐行の繰り返しで進行は遅かったが、完全に運行を続けた。夜は暴民の来襲に備えて見張りを立てた。しかし無蓋貨車なので雨にはずい分なやまされた。

翌朝思いがけなくハルピン時代の友人六人と逢った。召集を受けて奉天方面に応召した筈だったが、終戦と同時に逃げてきたそうだ。この日新京にソ連軍が入城した。夜になって一行九人で相談した末、しばらく新京に止ま

り様子をみることにした。その晩は郵便局の倉庫を開けて、難民に郵袋を分配した。勿論誰の許可を受けたわけではないが、誰がするともなく自然にそうなったのだ。

翌朝早々再び新京駅の構内にもぐり込み、更に軍服、シューバ、防寒靴を失敬して冬の準備を整えた。その後九人で中央局にいとまごいして街へ出たが、戦前あんなに美しかった大同大街には、人っ子一人見当たらず無気味な淋しさばかり身にしみた。

お昼ごろ私共は市の北端の政府官舎に着いた。あの広大な官舎街のどの家にも主人がなく、ただ家財道具のみそのまま残り残され、静かに立ち並んでいた。私共はその中でも最も良い官舎に陣取って、これからの対策を練ることにした。

その晩は風呂を沸かして、いい気分ですべて食事した。ガスも水道も異常なし、この官舎の主人公は大分ぜいたくだったとみえて、碁盤も将棋盤も立派なものがある。調度品も良く本棚には本がいっぱい並んだままだ。私共はここに六日間を過ごしたが、確かな希望ある情報は何一つ得られなかった。何が何やら判らないままゴロゴロ

と過ごしたが、治安は日一日と悪化していた。

こんなことでは南下もできないし、何もしないまま自滅するばかりだ。ハルピンを離れたもののそれでは全く意味がない。私共は毎晩無意味な相談を繰り返した。結果、再びハルピンに戻ることに決めた。

噂によれば奉天から北上した民兵の団が、ハルピンに進駐するらしい。当然汽車が出るわけだ。身の危険もあるがとに角その列車に乗り込むことにした。ハルピンで噂にきいた建軍運動とは結局こんなものだったのか。友人達は南下を主張したが、南下する汽車も無いまま、私共三人がハルピンに出立する朝になって、皆んなついて来ることになり行動を共にした。

その晩再び中央郵政局に一泊し、私共は更にリュックを整備した。翌朝暗いうちに新京駅にもぐり込み、民兵を満載したハルピン行きの後部の満人旅行者の団に、満人を装った一行九人は黙って乗り込んだ。

ハルピンの男狩り

列車は北行する。私共がハルピンを離れてから既に十日は過ぎている。みなどうしていることやら、ハルピン

はどうなったやらなど話し合っては、刻々近くなるハルピンに思いを馳せながら、お互いに窓外の景色に見入っていた。陶頼昭駅も通過してそれからしばらく時間も経過した。間もなくハルピン駅だ。汽車は速度をおとし鐘の音を響かせながらハルピン駅に入った。

私共は故郷に帰ったような気分で、ホームに降りたその瞬間、停車場警備の多勢のソ連兵に全員逮捕されて仕舞った。こんな情報があったら途中で、列車から飛び降りる方法もあったのに致し方もない。

不安の中に私共はソ連兵の銃剣に追い立てられて、ハルピン市郊外の香坊に連行された。なつかしいハルピンを横目で眺めながら、旧日本軍兵舎であった香坊の収容所にはおり込まれた。私共は何が何だかわからないままに、完全に捕虜にされて仕舞った。それは八月二十七日のこと。後日ハルピンの男狩りと称されたその男狩りに引懸ったわけだ。

そのころ私のリュックの中には、協和会服一着、手ぬぐい二、三本、手袋靴下若干、下着類のほかにカンパンや砂糖もあり、タバコマッチかみそりなど洗面具も入っ

ていた。所持金は数回の身体検査のたび毎に強奪されて、八千二百円になっていた。

この収容所には既に五千人からの、日系男子が収容されていたが、その中には郵政関係者が四十二人も入っており、私共は全く心強く感じた。皆んないろいろな場所で男狩りに逢ったため、着る物もなく金など勿論持つていなかった。私と牧野さんは相談の上所持金の中から一人宛百円づつ分配した。更に私は全裸の二人の友人に上下一着の服を、それぞれ上下に分けて着て貰った。

この収容所では食べ物はどうにかなったが、水の確保に苦労した。一杯の水に順番を待てば二時間はたっぷりかかった。

翌日総ての捕虜の集合が命ぜられ、編隊を組むよう申し渡された。私共は第一大隊第三中隊に編入されて、郵政小隊ということになった。一個小隊三十人から四十人、一個中隊二百人、一個大隊二千人である。郵政小隊は最も多くて四十二人だった。

日本人はこうした作業は特にうまい、捕虜編隊はまたたく間に完了した。ソ連軍は捕虜に対しては、何の保護

も給与もしなかった。食糧のみか宿舍も不十分で、衣類は勿論医療等何もしてくれなかったので、弱い者や病人は次々と死んでいった。雨の降るジメジメする軒下でみんな重なり合って寝ていた。私は一晩は戸外で一晩は馬小屋で、そして三日目は寝せられぬまま、あてのない行軍の出発が命ぜられた。

ハルビンの男狩りこそ日系市民には、最も苛酷で非人道的なソ連軍の作戦であり、多くの悲劇を生んだ元凶でもあった。寝所から便所から風呂場から、買物の途中から汽車電車の中から、或は裸で素足で全く無一物のまま、野良犬狩りのように無理矢理捕獲されて、この収容所にほおり込まれたのだ。

そしていま皆んな編隊に組み込まれ、あてのない行軍を命ぜられた。これは全くの死の行進で、笑うことの許されない大仮装行列でもあった。

私はその中であって持たざる者の中でも、富める捕虜であった。

捕虜行軍

——八月二十九日雨天——

私共は雨の夕方出発を命ぜられた。第一大隊の全員に出発命令がでたのである。私共は三日間の香坊収容所生活に、すっかり堪えられない気分だったので、この命令には心の奥に幾分安堵に似たものを感じ合った。皆最低生活の中では平凡は苦しいものだ、変化を求めているのだ、それがより苛酷な道であろうとも！。

私共は収容所の裏門から鉄路に添うて、東北方面に徒歩で香坊をあとにした。第三中隊第三小隊より出発で、私共郵政小隊は最前列である。私は四列従隊の右翼先頭を、雨に打たれて黙々と歩き続けた。途中思い出してはリュックの中から角砂糖をとり出し、食べながら歩いたが、雨に濡れた角砂糖は角がとれて丸くなっていた。

夜半になってハルピン東方の三棵樹駅につく、ここから多分鉄道輸送であろう。行き先が判らないまま皆んな不安が先立ち、最悪の場合のみを想像して、正に人生の岐路に在る心境だった。

私共は何等かの方法を考えなければならなかったし、このままでは捕虜に甘んずるのみだった。私共はまだこの辺であつたら逃亡もできたが、その後の同僚の迷惑や

決定的でもない現在の境遇に、その実行も決しかねたし他の皆さんもそうであった。

私はここで泣く男や狂った男もみたし、友人を元気づけている元気な者もたくさんみた。しかし私は矢張り平凡な私で、この時になっても自分を決することはできなかった。終戦前相当な地位に在った方々に「どうしますか」と、尋ねてみたがみんな力なく黙っていた。情けない気もするがこの様な状況の中で、そんなことを尋ねる方が非常識なような気もした。

やがて構内に入っている貨物列車の前に、集合するよに命ぜられた。乗車の準備であるが、私共はホームに積んである包米や大豆の大麻袋を片っ端から引っ繰り返して、毛布代わりに身につけた。乗車が命ぜられたが全部貨車だ、ホームは真暗でその上目的地はどこやら誰も知らない。ロシア語のできる同僚がそれとなくソ連兵にきいたが、引率のソ連兵も知らないということだ。

この貨車の一番前に一両だけ古い客車がついていて、それには引率と監視のソ連兵が乗っていた。私共は貨車に乗り切れずはみ出したので、十人ばかりの同僚と共に

その客車に入れて貰ったが、ソ連兵は何もいわなかった。やがて貨車はレールのきしりを残して、淋しく三棵樹駅を後にした。

——八月三十日晴天——

夜が明けてみると貨車は小さな駅に停車していた。この貨車で何日か過ごした様な、それでいてみんな夢の様な変な気持ちで窓外を眺めた。ホームは物売りで一ぱいだ。私も食糧を求めて下車したが、そのちょっとした間にこの駅の警備兵みたいなソ連兵に、八百円を強奪された。しかしこの駅が牡丹江間の小駅で、貨車は南下していることを知った。

貨車は間もなく発車した。私は私共の足もとで昨夜から喰り通しにうなっている、満服姿の二人の日本人にパンをやろうと、声を掛けたが死んだ様に動かなかった。

この二人は昨夜三棵樹駅を発って間もないころ、進行中の客車にしがみついたのを、そおと中に入れて通路に寝せておいたのだ。二人とも相当負傷している。よくもこの体で進行中の客車に飛び乗れたものだ。この車にはソ連兵もいるので、みんな二人を取り巻いているい

ろ話をきいた。

この人達が東満から逃避するときは、二十人以上だったそうだ。四台の馬車で部落を脱出したが、途中馬車を奪われてバラバラになり、八人で山野をさまよい続けたが、再び満人に襲われて命からがら逃亡中、鉄道線路に出たので一休みしているうち、この貨車が通ったので夢中で飛びついたそうだ。二人はみんなと逢えて嬉しいといったきり、今朝まで眠っているのだ。

列車は南へ南へとゆっくり進行する。しばらくして再び小駅に停車したとき、武装した日本軍上等兵が指揮官に面会したいといって、単身この客車に入ってきた。ソ連兵はよってたかってこの軍人の武装を解除して、私共同様捕虜の仲間にして仕舞った。

彼はそれでも大きな声で「この近くの山中に将兵二百五十人いるが、条件次第では会談してもよい」と、繰返しくりかえし叫び続けた。ソ連兵は何も判らないままそれをきこうともせず、捕虜の一員に加え列車は何事もなかった様に、再び鐘の音を響かせてこの駅を発車した。山中の日軍将兵二百五十人は、この上等兵の安否如何に

と、さぞや数日を待ったことであらうと思うと、ソ連兵の心ない仕打ちに私共一同ただ情けなく口惜しかった。こうした事は今次大戦では至る所で、繰り返されたことであつたらう。

それから間もなく二人の満人服の日本人は死んでいった。私は角砂糖を水にとかして口に移してやったが、二人の咽喉は通らなかつた。次の駅で二人の屍を客車の外に出したが、一人は右の乳の辺から腹の辺まで切られており、黒くなった血が胸一ぱいねばりついていた。他の一人は片脚の大腿の肉がそげ落ちて、骨が見える程だった。私共は余りの事にびっくりすると共に、この体でもくもこの客車にしがみついたものだ、今更ながら人の命の執念におどろいた。二人は日本の敗戦を知らなかつたし、勿論誰もそれを知らせなかつた。

——八月三十一日朝小雨後晴——

汽車が牙不力駅に着くと同時に、ソ連軍の戦車兵団が鉄路に添うて北上してくるのに出合った。兵団はハルピン入城を急いでいるのか、貨車に停車を命じ轟々と通り過ぎていった。

もう貨車で南下するのは不可能だ、私共は下車を命ぜられた。大隊は編隊順に二列の体形で、線路脇に延々と列を作った。いよいよこれから徒步行軍である。貨車であつても歩くよりは極楽だったが、これからは自分の脚のみが頼みの綱だ。そして更に希望のない大行軍の出発が命ぜられた。

引揚列車

昭和二十一年八月二十八日、終戦後一年余りを経て漸く私共は待ちに待った引揚げの途についた。ハルピン発の有蓋貨車に乗車を命ぜられたのが正午過ぎだったが、その日貨車は発車しないまま駅の構内に一泊、翌二十九日の早朝になって引揚列車は鐘の音を残してハルピン市を後にした。

吉林經由のこの列車は途中停車を重ねながら、その度に満人の物売りから食べ物求めて、窮屈な貨車の旅ではあつたが帰国の喜びに湧いていた。

私共ハルピン発引揚乙第十一団は二千五百人の大世帯で、一車両に二百人前後乗車したので、確かに不自由だったが輸送の八路軍の兵士も親切で、さして困難も不安も

感じなかった。

貨物輸送で特に困難なのは大便小便で、その為私共は石油缶とゴザを用意していた。そして求めがあれば石油缶を廻してやり、用使中は隣の者がそれをゴザで覆ってくれた。又貨車は進行中は中が真暗で四方の景色も見えないので、全く退屈だが皆んなとりとめもない話題で、相手を笑わしてはお互いに楽しんだ。そして停車すれば大いそぎで扉を開けて、空気を入れ替えたり物売りから食糧などを求めた。

私は生れたばかりの美代子がおったので、オシメや赤ん坊のものはリュック一つ用意したが、一日一回洗濯の必要があった。私は予め長い紐をつけた鉄兜を携帯して、水汲み用に使っていたが勿論兵隊の捨てたものである。貨車が停車する度に飛び下りて、水を求めて大いそぎで洗濯した。洗った物は貨車の天井に吊るして乾燥した。

私共は携帯食品も若干持っていたが、時々は高粱を炊いて汁も作って食べたが、これは又大変な仕事で技術を要するものであった。私は食器兼用の小さな平鍋を持っていたので、停車時間の長い時は貨車の下にもぐり、枕木と枕木の間の砂利を掘り取って、枕木に鍋を渡して附

近の木片を集めて燃やし高粱を炊いた。或る時などは予定より早く発車したため、炊けない食事をしたこともあった。

炊事洗濯用に限らず引揚中の日常生活は、全く特異なもので恥や外聞を超越した笑えない喜劇であり、悲しい生への執着であった。

そんなことを繰返して私共はハルピンを出て三日目、ハルピン吉林間の共産党軍と国民党軍の対峙する、最前線で下車を命ぜられた。ここから老爺峯駅まで十二キロの間鉄道が不通なので、私共は歩く以外に方法がなかった。

それでもここから八キロ以内の、共産軍陣地内には馬車が往来していて、金のある者は競って大車を雇った。満人雲助共は引揚者の弱味につけ込み、三千円の馬車賃を前金でとっていた。

私共は気の合った八人と相談して三百円宛出し合って、やっと一台の大車を雇い入れた、病人と荷物を運ぶ為で致し方のないものだった。私は三個のリュックの中二個積んだ、産後二十四日目の妻は元気で歩行し、私は残るリュックを背負い美代子を抱いて、この大車の前になり

後になりして歩き通した。

そんな折一台の大車に四人の女の一团が、物見遊山にでも出掛ける風情で、笑いさざめきながら乗っていた。老人は同乗を頼んだがとり合わなかったし、二人の子を背にした婦人はせめて一人だけでもと、惘願していたが見ぬ振りだった。

そして私共の前になり後になりして、八キロを乗り通した。何れも二十五・六の年輩だ、皆んなは苦々しげに「満州女郎さ、あんなのがいるから負けたんだ」と、さかんにうっ憤を投げかけて、さも敗戦の責任者でもあるかのようにののしっていた。私はそれでも平気を装う彼女達に或る異人種を感じた。

八キロの共産陣地を乗ったり歩いたりした一团は、残る四キロの政府陣地は歩くのみだった。隊列は延々と炎天下の蟻の行列に似て、皆んな前の人に遅れまいと懸命に歩き続けた。リュックと子供を共に背負った婦人が多く、老人や病人を背にした者も多かった。殊に大きなリュックを背負い二人の子供の手を引く婦人もあり、心の中に同情しても誰も何もしてやれないのが現実だった。

その隊列の中を私はリュックを三個背負い、妻と共に生まれたばかりの娘を交互に抱きながら、国民党軍の前線を通して老爺岑の検問所に着いた。

ここで全員所持品の検査を受けた、私の所持品は一人一個で三個のリュックだけなので、検査は面倒でなかったが、北満の孫呉で六か月で死んだ、ミキ子の骨箱を貴重品でも思ってたか、ひっくり返して検査されたのには全く憤慨した。お骨は道端の砂塵にまみれて黒っぽくなっていた。

赤い夕陽が四方を染めてそして夕闇がせまり、それからもしばらくの時が過ぎたが、貨車を目前にしてまだ乗車命令が出ない。皆んなもう線路に添うて、死んだ者のように動かない。昼の疲れも手伝ってか動く気力もないのだ。時折り火がついたように乳呑児の泣き声だけが、あたりの静寂を破るがそれも栄養失調が張りがない。勿論どの母親だって乳など出ないのだ。老爺岑駅はもうすっかり夜になった。

私も線路脇の草むらに座って今か今かと、政府軍の乗車命令を待っている。そして膝の上には美代子を抱いて

いる、傍らにはリュックに寄った妻が時折り眠っては、また不安そうにあたりを見渡していた。

だがこの駅を警備する政府軍の若い兵士の一団は、なぜか乗車命令を出してくれない。団長は交渉のため駅長室に入ってから、既に二時間にもなるのに一向に要領を得ないようだ。その間私共は線路脇にゴロ寝のまま、安否を待っていたがいつの間にか昼の疲れも手伝って、眠ったようにひっそりして仕舞ったのだ。

やがて「責任者集合」と団長の声が闇に響き、私共の小林隊長も駆けていった。間もなく帰ってきて「皆んな聞いて呉れ、汽車の方は話が決まったが兵隊は幾らか欲しいと、いっているのので濟まないが、一家族当り百円宛出して下さい」とのことだ。

私はバンドの内側から百円札を抜き出して、小林隊長に渡したが、これで私の残金は二千三百円になった。

鉄路に添うて延々と、死んだように眠っていた二千五百人は、俄に動き始めざわめきだした、百円を徴発された非難と乗車できる喜びの声でもあった。

そんな騒ぎも間もなく多忙な乗車作業に変わった。私共

の隊の男達は割り当てられた四両目に、皆んなの荷物積みに取りかかった。荷物が終るとその上に病人を乗せた、次は老人と子供でその次は女の順だ、この無蓋貨車一両に二百人位が荷物と共に乗り込むので、もう元気な男達の乗る場所がない。

私は四両目と五両目の連結点の縁に腰を掛け、張り渡した綱につかまった儘で、無蓋貨車はお天気の良い時は極楽だが、雨が降ったらそれこそ地獄だとそんなことを考えていた。

しかしどうしたことか乗車完了して、それから暫くしても貨車は発車しないのだ、小林隊長は降りて往ったり来たりしている。私も降りて「小林さんどうしたんです」と、きいてみた。小林さんは小声で「機関手が乗ってくれないんですよ、団長が金を届けた時は兵隊達はすぐに乗車を許可したが、今度は機関車係の兵隊が俺達にも何かくれ」と、いっているようだと話してくれた。

十三両編成の列車は荷物と人を積んだまま、再び不平と怒りだがあが騒ぎ始めた。程なく又団長の声で「各隊長集合」が伝えられ、小林さんが再び駆けていったが

漸くして戻ってきた。小林さんは往く時とは違いすっかり元気が無い、皆んな又何かあったなと思ひ瞬となった。

小林さんは「先刻百円宛出して貰ったので、乗車許可は出たが機関手の方は知らんといっている。しかし間もなく発車する予定なので、それまでの間女の人四、五人貸してくれ」と、言っているという。小林さんの声はきき取れない程だ、「金のことなら何とかできるんだがこのことだけはね」という。

各車両とも先刻の騒ぎもおさまって、皆んなそちこちで何やらひそひそ話し合っていた。妻は黙って隣の奥さんと顔を見合わせている。誰もどうすることもできない儘、貨車はすっかり静かになって誰も思案投げ首だ。皆んな考えあぐんだ状態で更に又眠ったようだが、私達もそうだった。それから暫く何かあったか誰も知らない。真夜中に近い頃であろうか私が気付いた時は、貨車は既に老爺岑を後にして進行中であった。闇の中を貨車は進行していて、皆んなすっかり眠ったようだ私も又眠った。

貨車はトンネルを出て南へ向かっている。何事もなかつ

たように今日も朝日が昇って、真赤な太陽が眼を射るような引揚四日目の朝である。

トンネルを出た引揚者は皆んな煤煙に汚れて、美代子も真黒になって仕舞った。私は何げなくふと前方の三両車をみた、貨車の片隅に昨日の大車の女達がいた。四人共真黒に汚れた体を寄せ合ったまま、まだ眠っているようだ。

第二松花江の大きな流れが前方に見えてきた。この流れは旬日の泊りを重ねてハルピンに着く。この流れの対岸の街が吉林市だ。河に懸かる前方の大鉄橋は破壊されて、十両ばかりの客車が橋桁に引っかかっているのが見えた。

これでは間もなく又下車であろう。三両目のさっきの四人は眼を醒まして、四方の景色を眺めているが昨日の元気はないようだ。しかし貨車の皆んなは松花江の流れを眺め、吉林市を遠くのぞんで急に元気になってきた。

鉄橋際で下車を命ぜられた私共は、しばらくここで休憩するよう申し渡された。私共は大河の流れで体を洗い衣類も洗った。そして皆んな河原の砂に体を投げて、寝

ころんだり食事をとったりした。

私は河岸から離れた物売り屋で、パンと鶏卵を求めて妻と共に、朝食とも昼食ともつかない食事をした。又河原でゆっくり高粱を炊き、食べた残りをお握りにした。

午後になって河岸の草原に整列した。これから筏に分乗して対岸に渡るそうだ。二千五百人は河岸に繋留した筏に、四列になって次々と分乗を開始した。筏は大木を何段にも組み合せたもので、運動場のような大きなものであった。

この筏は上流奥地で伐採されたもので、此所を通過する際一旦繋留し、引揚者を乗せて流れに従って対岸に寄せるのだそうだ。渡河に相当な時間を要して、やがて対岸についた一団は、再び長蛇の列で吉林市内へ向けて移動を開始した。

私は妻と娘とリュックを馬車に託して、收容所に直行させ小林隊長と並んで一行に続いた。その時又しても四人を乗せた四台の馬車が、一行を抜いて砂塵を卷いて駆け去った。矢っ張りあの例の女達であった。

私は小林さんと共に收容所に急ぎながら、これからの

引揚げ行程等について話し合ったが、その折小林さんは思ひ出した様に私に、「昨夜引揚列車を動かしてくれたのは、あの四人の女らしい。夜半過ぎ駅の詰所を出る四人に、団長は無言で頭を垂れていた」と、小さな声で話してくれた。

吉林市街が見えてくるころ、郊外には既に秋風が吹き、九月一日の空遠く遙か白雲が流れていた。

引揚船

九月十七日いよいよ待望の、引揚船の待つコロ島への出発の朝だ。皆んな嬉しさで一ぱいだが、空は曇り空でどんよりしていた。

例のとおり清掃された第五集中宮の前庭に、私共ハルピン引揚第十一団は四列の隊伍を組んだ。残留組も見送りに来ていて、一寸名残り惜しい気もする。

妻は生後間もない美代子を背にし、私は三個のリュックを背中一ぱいに背負っている。昨夜遅くまで私共の隊員三十数家族の所持金を、日本紙幣に兌換する作業を受けたので、寝不足の故か足もとがふらふらする。

点呼の上宮門を出て延々とした隊伍は、予定通り錦州

駅の貨車引込線に着いた。到着順に一貨車に二百人づつ乗車だ、相変らず無蓋貨車だ。先ずリュック等の荷物を敷きつめる、次は病人が乗って子供女性が続く、男はその空いた所へ適当に詰める。貨車の縁に馬乗りの者も居る。

貨車は発車したが全く遅い、走れば追いつく程の速度だが、皆んな乗船を前にして不平もない。そんな時一大事が到来した。ものの三十分も進行したころ、それまでの曇り空から雨が降り出した。悲しいことには無蓋貨車だ、降るに委ねて濡れるばかりだ。敷きつめたリュックや荷物は水びたしになるが、どう仕様もない。

間もなくコロ島駅に着いたが、雨は益々はげしく降っている皆んな散を乱して線路わきに飛び降り、濡れたリュックを肩にホームに駆け込んだ。私はリュックを妻に見張るよう申して、美代子を抱いてホームに走ったが、線路わきの鉄線に足をとられて、一回転したが幸い美代子は両手を持ち上げた儘だった。

私は駅構内に入って美代子の置く場所を探したが、全くごった返してこんな事では、踏みつぶされて仕舞う。

やむを得ず近くにいた男の人に、一時預かっていただけいで再び貨車に引返した。妻とリュックはすっかり濡れていた、水を吸った重いリュックを背に妻を伴って、駅構内のさっきの場所までできたが、構内はすっかり満員で先刻の男を探すこともできない。私はやむなく「子供を預かった方はいませんか」と、大声で連呼した。

程なくして美代子は、皆んなの頭越しに手送りで私のもとに返ったが、一時は気がでなかった。間もなく「コロ島収容所に向けて出発」という、雨の中を不規則な行軍が開始された。この時の行軍も筆舌に尽くせない悲惨なものであったが、乗船を目前にして皆頑張り通した。三十分程してコロ島収容所が見えてきた、雨はもう上っていた。

その日は暗くなるまで、衣類や荷物の乾燥で皆んな多忙を極めた。そちこちの焚火は夜になっても赤々と燃え続けていた。その晩私は炊事当番で、夕食後の一とき炊事室に誰かが置き忘れたジャガ芋を、腹いっぱい食べるこ

とができた。

その時まで多忙な故か気付かないでいたが、右足の内

側土踏まずの上の方が痛むので、靴を脱いでみたら茶色い瓶片けが、皮靴を通して突きささっていた。手ぬぐいをさいて応急に処理したが、その後十日ばかり歩行に不自由だった。

そんなこともあって夜半に宿舎に帰ったが、真暗い部屋の中には皆んな折り重なって寝ており、妻の位置も判らない儘、それ等の間に体を押し込んで眠った。

明けて十八日快晴、本日乗船するという。私共は再びリュックを背に昨日のコロ島駅に向う。又しても貨車に便乗、約二十分にして海の見える埠頭に到着す、ここが夢にまで見たコロ島だ。

渤海湾の海は黄色に光っていて、私共を迎えているようだ。この海が日本の海に続いている、海の向こうに故国がある、私共はこの日の訪れることを祈らない日があったらうか。

終戦直後の大陸の日本人は六百五十万人といわれている、半分は軍人であったが、これは「復員」という名で呼ばれ、残る三百二十五万人は「引揚者」という名で呼ばれた。引揚者という用語は外国に例がないといわれているが、

何れにしても六百万人以上の、日本民族の大移動は史上稀れではあるまいか。

その中百万人の日本人は、このコロ島から引揚げた。それも短い年月の間に大半の引揚げが完了したことは、当時国民政府が健在であったことと、米国の協力があつたからと思われる。

灼熱の太陽が情容赦もなく、引揚者の頭上からやけつくように照りつける中を、北から南へ追われるように、漸くこのコロ島に辿り着いた延々長蛇の列、その一人一人の足どりに苦難のあとがしみ込んでいる。

皆はしばらく埠頭に座して、遠い思い出をかみしめている。間もなく乗船だろう、中国兵がしきりに行ったり来たりしている。岸壁には米国のリバティ型輸送船が二隻、頼もし気に横付けされている。私共のはその内の一隻だろう。

「乗船」の命令があつた。思わず全員の渦の中から歓喜の叫びがどっと上った。日本に送り返してくれる船を目前にして、重い足も自からはずむ、全財産を背にしてさあ乗船だ。乗船の順番がやつときた、もう、息の辛抱

だ、船に乗れる船に乗れる、これでいまこそ日本へ帰れるのだ。

引揚者の中には夫が父が又妻が母が、欠けているのが普通なのだ、いざ乗船となるとその悲しみが身に迫る。皆んな涙の乗船だ、タラップを上る一人一人に、戦争の悲しみがこれ程強く印象づけられる姿はないであろう。特に母の遺骨を抱きしめて、大陸を流れ流れてやっと引揚船のタラップを、いま上りゆく孤児の姿には、皆声をあげて泣いた。

船はリバティ型V〇二十号、乗船者二千五百人、内宮城隍人七十一人であった。正午乗船完了、直ちに出港。ドラが鳴った、私共はコロ島と満州の山々に、最後の別離の手を振った。

コロ島の山々は遠ざかる、皆んな申し合わせたようにラバウル小唄の替え歌で、「さらば満州よ又くるまでは」と、いつまでも手を振り乍ら唄い続けた。

栄光の座から奈落の底へ

東京都 中村 八郎

ソ連が日ソ不可侵条約を無視して、手薄なソ満国境を破竹の勢いで、南下してきました。その頃所用があつて、哈雨浜道外を、車で通過しましたが、今まで、軒なみにはためいていた日の丸の旗と五味共和の満州国旗が、ソ連の赤い星の旗と晴天白日旗にとって代わっていたのです。

異様な光景に、直接の殺意が感じられなかったものの、背筋が硬直したのは、私一人でなかったと思います。そして一週間後に終戦となりました。

昭和二十年八月十五日、あちこちで満人の暴動が occurred。八月十六日には、哈雨浜の主な機関が、ソ連軍に接収されました。八月十七日には、機甲部隊が入城してきました。

戦火からのがれた開拓団の人達が哈雨浜に集積された。やつれた、うつろな目で、牡丹江から、チチハルから、